



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

謹賀新年

本年もご愛読のほどをお願い申し上げます。

「インド・大菩提寺物語」⑥

クイズ問題3：この仏旗を制定したのは、どこの国の人でしょうか。

1. インド人 2. スリランカ人 3. アメリカ人 4. チベット人 5. 日本人

まず仏旗について説明しておきます。お正月や祝日、法要のとき、お寺の門に国旗や仏教の旗が掲げてある。あれが「仏旗」です。見たことがあるでしょうか。

国旗（日の丸）は、1999年に国旗国歌法によって制定された。それ以前から、日本の国旗といえば、日の丸であった。聖徳太子が遣隋使（607）に托した国書に、日本を「日出ずる国」と称したのが始まりと言われている。当時の大国「隋」を「日没する国」と認めたため、隋の皇帝・煬帝が激怒したという逸話がある。東方の僻島の田舎者が、無礼極まりないと煬帝は怒った。

そのころ天竺印度の人が、日本（倭国・大和）の存在をどの程度知っていたか不明であるが、彼らは東（日本）に向かって毎朝礼拝していた。もちろん日本ではなく、東から昇る太陽に向かって手をあわせていた。それゆえに、大菩提寺の正門は東にむかって開かれている。

インド渡来僧ボーディセーナ（菩提仙那）が、736年に招聘されて日本にやってきた。太陽が昇る地平線の彼方に何があるのか、と関心をもったのかもしれない。ボーディセーナに「サンセット（日没）の国から来た僧」と言ったら、僧は激怒したであろうか。否、激怒しない。天竺の僧は感情を制御する術（瞑想）に熟知していたからである。

煬帝（中国）と渡来僧（インド）のコントラストは、なにやら現代でも通用しそうである。

日の丸を知らない日本人はいないが、「仏旗」について知る檀家は少ない。漠然と見たことはあるが、あれが仏旗だと確かに認識したことはないのが一般的である。

まずは正解を提示しておこう。3のアメリカ人である。

実は、仏旗の由来を知らないお寺さんは多い。お寺さんが知らないのに檀家が知るはずもない。そこで由来について次に語っておこう。

アメリカ人オルコット大佐 (Henry Steel Olcott, 1832-1907) が制定した、というのが定説になっている。南北戦争に従軍した名残りで、大佐の敬称で呼ばれていた。彼は謎めいたロシア人ブラヴァッキー夫人と出会い神智学協会をニューヨークで設立し、初代会長に就任した。1882年神智学協会本部をマドラスに移した。

その後、いろいろあってスリランカに渡り、1880年城塞都市ゴールで五戒を受け仏教徒になった。彼はスリランカでは、独立や仏教教育に寄与した英雄であった。

だいたい以上の流れの中で、オルコットが仏旗を制定したというわけである。それ故、答はアメリカ人ということになる。おそらく、読者諸氏はインド人、スリランカ人、あるいはチベット人を想起したと思う。日本人と思った人も僅かにいたかもしれない。不正解ながら、その日本人とは誰か、とわが輩は読者に聞いて見たい気もする。

オルコットが制定したという論拠はどこにあるか。彼の日記 (1885年、P. 350) の第25章に「仏教旗の制定」(Establishing A Buddhist Flag) とある。これが証拠になる。

ここで少し問題になるのが、オルコットが五色の光 (ブッダの身体から発せられた青、黄、赤、白、オレンジ) も採用したのか、ということである。どうやら、これに近いものをスリランカ人が採用していたようである。ところが、彼らが使用していた五色の旗は長かった。それでオルコットが、国旗のサイズにしたらどうか、と提案して仏旗が制定された。

それでは、仏旗らしきものに、いつごろから五色が用いられるようになったのか。これは明らかではない。

日本のお寺にお参りすると、本尊・導師座の頭上に傘 (天蓋) が吊り下げている。その両脇に長い盆提灯 (ぼんちようちん) のようなものが吊り下げられている。それらを幢幡 (どうばん) という。幢は「のぼり」、幡は「はた」のことである。今日では木・金属で製作されているが、かつては布製であったであろう。それは何色であったか分からないが、染色していたら草木染であったであろう。それでは五十年も保てない。というわけで、正確な色は不明である。

ところで、仏旗といっても万国共通ではない。日本の仏旗 (五色旗) は、青 (緑)・黄・赤・白・黒 (樺色、紫) が基本となる。スリランカ、インド、ネパール、チベット、ミャンマー、ラオスなどは、ほぼ同じようなデザインである。タイは法輪、韓国は卍をシンボルとしている。

以上を鑑みて、オルコットが仏旗を制定した、と言っても過言ではない。

大菩提寺を案内する地元のガイドも知らなかった。わが輩の解説を疑り深く聞いていた。

わが輩の若きころ、戦争の反省から国歌を斉唱しない、国旗を掲揚しない風潮があった。わが輩もそれに同調していた。ところが、インド人から国歌を歌ってくれといわれて戸惑った。日本領事館に掲げてある日の丸をみて感動し安心したことがある。政府から強制されなくても、わが輩も日本人であることをインドで自覚した。日本にいと、日本人であることの自覚は薄い。若い人は、ぜひ海外に出て欲しい。それも物見遊山の観光ではなく、自分探しの旅に出立してはどうか。

その旅で、日の丸をみて安心するもよし。仏旗を仰ぎ見て、平等と自由解放を感じるなら、それも良きこと。コロナ・ウイルス災禍から解放されて、老いも若きも、今年こそ人生の旅にしよう！

Blue (Pāli and Sanskrit: *nīla*): The Spirit of Universal Compassion

Yellow (Pāli and Sanskrit: *pīṭa*): The [Middle Way](#)

Red (Pāli and Sanskrit: *lohitaka*): The Blessings of Practice – achievement, wisdom, virtue, fortune and dignity

White (Pāli: *odāta*; Sanskrit: *avadāta*): The Purity of Dhamma – leading to liberation, timeless

Orange (Pāli: *mañjeṭṭha*; Sanskrit: *mañjiṣṭhā* - alternatively scarlet)

ラトナグラハ： RATANAGRAHA (R)、RATANAGAHA (P)

梵天、帝釈？が宝の家を設けたので悟りを点検。釈尊の身体から五色（青、黄、赤、白、オレンジ）の光が発せられた。

称する

1880年5月17日カコットは仏教に関心を持ち始め
コロンボに到着、ゴールにやってきた。

1882年、マドラス（現チェンナイ）南郊のアディヤール (Adyar；アディヤール^[† 8] [Adayar] と
も) に神智学協会本部が設立される。

と呼ぶと、軍人が制定したのかと思ってしまうが、制定時は軍人では

エディ農園を訪れ、そこで、ヘレナ・P・ブラヴァツキーに会った。精神運動に関する興味と
ブラヴァツキーの出会いが精神哲学をより深めることとなった

南北戦争の時、アメリカ陸軍に勤め、その後、ニューヨーク市軍事局の特別委員に選ばれた。後
に大佐にまで昇進し、ワシントン特別市の海軍局に異動した。彼は重要視され、1868年にリン
カーン大統領が暗殺された時には、その調査に協力するにいたった。1868年には、詐欺、税金
と保険専門の弁護士になった。

ボーディセーナ（サンスクリット語: बोधिसेन', ラテン文字転写: Bodhisena）^[3]、菩提僧正^[1]、菩提
仙那とも称され

隋の2代皇帝・煬帝（ようだい）が激怒したという記録が残る。

日出処（ひいずるところ）の天子、書を日没処（ひぼつするところ）の天子に致す

日本の国旗（にっぽんのこっき、にほんのこっき）は、白地に赤丸が描かれた旗。法律上は日章旗（にっ
しょうき）と呼ばれ、日本では古くから、一般的に日の丸（ひのまる）と呼ばれる。日本では聖徳太子が遣
隋使に託した文書以来、自国を"日出ずる国"とする考え方があり、赤い日の丸は日の出の太陽を象徴
する。また紅白は日本の伝統色で、めでたいものとされており、赤は博愛と活力、白は神聖と純潔を意
味するとも言われている。^[1]

1999年（平成11年）に公布・施行された「国旗及び国歌に関する法律」（通称：国旗国歌法）の規定によ
れば、「旗の形は縦が横の3分の2の長方形。日章の直径は縦の5分の3で中心は旗の中心。地色
は白色、日章は紅色」とされている。上下・左右対称である。

大菩提塔正面（東）から時計回りにまわると、裏側（西）に菩提樹と金剛宝座がある。その横に、右足と両足の二つの仏足石がある。

地元の説明では、両足のものはブッダのもので、片足のものはヴィシュヌ神のものだという。ブッダ・ガヤーの近くに先祖供養の聖地ガヤーがある。そこにヴィシュヌ神の聖足石が祀られている。またお土産物として、銅板に足跡を描いたものも売られている。先祖供養に訪れたヒンドゥー教徒の多くがブッダ・ガヤーに参詣する。ブッダはヴィシュヌ神の九番目の化身だとされているからである。

スリランカの仏教徒は、右足もブッダの聖足石だという。ならば、左足はどこにあるのか。スリランカにブッダが飛来した仏足山頂（スリー・パーダ）に仏足石がある。その聖足石が左足だという。

ブッダの入滅後、ブッダの存在を表現するものとして、塔、法輪、菩提樹や仏足石で表現された。仏像をつくって礼拝するようになったのは、2世紀頃だといわれている。ギリシャの影響を受けたガンダーラ説と、インド起源のマトゥラー説がある。

ところで、わが輩が聞いているのは、なぜ足を礼拝するのか、ということである。

「汚れる足裏ではなく、手ではいけなかったのか？」

足に比べたら、手の平・指は万能である。食べることも、物を握ることもできる。足は歩くだけの機能である。

この問題を考えるのに、ヒンドゥー教のパードカー・プージャの儀礼を紹介してみる。パーダは足、プージャは祈りの意味である。入滅したグル（師匠、聖者）の木製スリッパを神聖なものとして崇める儀礼である。履物を聖水やミルクなどで浄め、その全体を花で覆い飾るのである。つまり「故人」ではなく、今ここに存在するグルとして、御足にひれ伏し礼拝するのである。ここで重要なポイントは、イメージネーションである。この履物の上に透明なグル、生存中のグルの姿をイメージすることが不可欠なのである。

龍谷大学のある仏教学者は、仏足石の上に透明なブッダが立っておられる、それ故に仏足石は尊いという説を述べている。従って、仏足石の足指はわが輩の方を向いていなければならない。逆に踵がわが輩の方に向いているなら、ブッダはわが輩に背を向けていることになる。

このようにみると、聖足については仏教もヒンドゥー教も同じような発想である。“聖手石”では、聖なることば（手話、法印）を表現できても、身体全体をイメージするのに難がある。

近畿大学のある教授は、雨期にブッダが歩いたあとにできる足形が仏足石に発展したという説を述べている。前述したクリシュナ神の足跡の話はこの説を補強するものである。たしかに、ブッダが歩かれた足形の上を弟子や信徒が踏みつけることは畏れ多いことである。

わが恩師（文化人類学者）は、どのように推測しているか。

南インドで、寺院や民家の玄関に米の粉で吉祥の模様を描いている姿を見たことがある。南インドではコーラム、東インドではアルボナという。これは模様を描くことによって幸福の神さまを招き入れることを意味している。この花模様を踏みながら、わが家においでませ、ということである。それが仏足石に発展したのではないかと関連性を述べている。

ところで、話は全く違うが、ある教授から「なぜ、神は沈黙したもうのか？」という問いを頂いた。遠藤周作の『沈黙』の一場面のことである。深い難問である。

最近親しいクリスチャンがコロナ・ウィルスに罹患して亡くなった。信仰深く奉仕に献身的な人であった。それなのに、何度も悲惨な禍（事故）に襲われた。なぜ、神はこのような御業（沈黙）をなされるのか、

わが輩は納得できなかつた。

さて、ヒンドゥー教徒たるわが輩は、教授に何と返答したか。

「それぞれの神が、それぞれの言葉を発すると、私には雑音に聞こえてしまいます。それで神は沈黙してしまつた、とも思えます。それぞれの信徒がそれぞれの言葉で救いを求めるために神は聞き取れない、のかもしれない」

ミトラ城前の天満宮は入試合格・学業成就で有名だが、神さまが神力で一人の受験生を合格させると、他の学生を落とすことになる。これは理不尽だろう。だから神さまは耳をふさいで沈黙するしかない。どうかボクを不合格にして、他の受験生を合格させて下さい、とはだれも祈願しない。

仏足石の話にもどすと、われらが出来るのは、仏足石に跪いて御足を頂くことだけである。その瞬間だけ、人は謙虚になれるからである。